

第 1 問（万有引力，仕事の計算）

【メモ】

- ・問 1 は等速円運動ゆえ，運動方程式の中心成分を立てればよい．今回はこれで事足りるが，他方向のつりあいを立てる必要がある場合もある．
- ・問 2 以降は取り立てて触れる点はない．

【解答】

問 1 運動方程式（中心成分）より，

$$m \frac{v^2}{r} = G \frac{Mm}{r^2}, \quad \therefore v = \sqrt{\frac{GM}{r}}.$$

周期 T ，角速度 ω はそれぞれ，

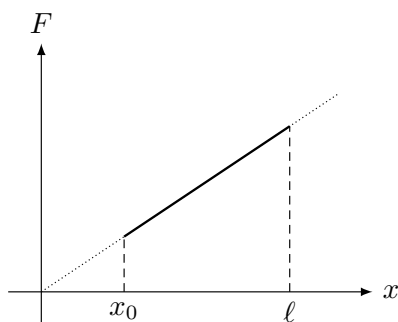
$$T = \frac{2\pi r}{v} = 2\pi r \sqrt{\frac{r}{GM}}, \quad \omega = \frac{2\pi}{T} = \frac{1}{r} \sqrt{\frac{GM}{r}}.$$

問 2 公式より，

$$F_G = -G \frac{Mm}{(r+x)^2} = -G \frac{Mm}{r^2} \left(1 + \frac{x}{r}\right)^{-2} \doteq -G \frac{Mm}{r^2} \left(1 - \frac{2x}{r}\right).$$

問 3 遠心力を考慮して，

$$F = m(r+x)\omega^2 + F_G = m(r+x) \frac{GM}{r^3} - G \frac{Mm}{r^2} \left(1 - \frac{2x}{r}\right) \doteq \frac{3GMm}{r^3} x.$$



$F - x$ グラフ

問 4 仕事の定義より，

$$W = \int_{x_0}^{\ell} \frac{3GMm}{r^3} x dx = \frac{3GMm}{2r^3} (\ell^2 - x_0^2).$$

問5 回転する座標系で観測した物体のエネルギー収支より^{*1*2},

$$\frac{1}{2}mv_x^2 - 0 = \frac{3GMm}{2r^3}(\ell^2 - x_0^2), \quad \therefore v_x = \sqrt{\frac{3GM}{r^3}(\ell^2 - x_0^2)}.$$

^{*1} 勘違いをされないように：エネルギーを成分で分けているわけではない（エネルギーは成分分解できない）。回転座標系で観測した x 方向の運動方程式の両辺に v_x との積を取り，形式的にエネルギー収支の式を計算しただけである。

^{*2} 物体の速さは， $\sqrt{v_x^2 + (r + \ell)\omega^2}$ 。

第2問（電磁誘導－ファラデー則）

【メモ】

・ファラデー則でも整合した結果が得られるが、現象としては vBl の公式（ローレンツ力に由来する起電力）によって説明される．ファラデー則では、ループ一周あたりの起電力が求まり、その値は

$$\mathcal{E} = -\frac{d\Phi}{dt}$$

と計算され、起電力の正の向きは、磁束の正の向きに対して右ねじの方向を正と定める．

【解答】

問1 扇形の面積を計算して、

$$\Delta S = \frac{1}{2}r^2\omega \cdot 1 = \frac{1}{2}r^2\omega.$$

問2 ループを扇形に定める（磁束の正の向きは磁束密度と揃える）．ファラデー則より、

$$|\mathcal{E}| = \left| -\frac{1}{2}Br^2\omega \right| = \frac{1}{2}Br^2\omega.$$

このとき、 P_1 の方が高電位．

問3 キルヒホッフ則より、導体棒には $I = \frac{Br^2\omega}{2R}$ の電流が流れる．よって、導体棒が磁場から受ける力の大きさは $F = \frac{B^2r^3\omega}{2R}$ であり、力のモーメントのつりあいより、

$$0 = F_{\text{ex}} \frac{r}{2} - \frac{B^2r^3\omega}{2R} \cdot \frac{r}{2}, \quad \therefore F_{\text{ex}} = \frac{B^2r^3\omega}{2R}.$$

問4 装置2について、電流は P_2 から O_2 に向かって流れる．したがって、導体棒は $\underline{d}$ 方向に運動する．

問5 キルヒホッフ則より、

$$0 = \frac{1}{2}Br^2\omega - \frac{1}{4}Br^2\omega' - RI, \quad \therefore I = \frac{Br^2}{4R}(2\omega - \omega').$$

問6 装置2の導体棒が一定の角速度で運動することから、このとき $I = 0$ である．よって、消費電力は $\underline{0}$ であり、

$$\omega' = \underline{2\omega} (= \omega_2).$$

【補足 1】 $vB\ell$ 公式

中点の速さを用いて,

$$V = \frac{1}{2}r\omega Br = \frac{1}{2}Br^2\omega.$$

きちんと計算すれば, 位置 x から $x + \Delta x$ ($\Delta x = r/N$) の微小区間にある部分に生じる起電力を, $x = 0$ から $x = r$ までの総和を計算して,

$$\begin{aligned} V &= \lim_{\Delta x \rightarrow 0} \sum_{k=0}^{N-1} x_k \omega B \Delta x \\ &= \int_0^r x \omega B dx \\ &= \frac{1}{2} Br^2 \omega. \end{aligned}$$

【補足 2】 問 6 の詳細

装置 2 の導体棒の回転の運動方程式を考える^{*3}. 装置 2 の導体棒の慣性モーメントを M とし^{*4}, アンペール力の作用点は導体棒の中心とする. すると, 回転の運動方程式は,

$$M \frac{d\omega'}{dt} = I \frac{B}{2} r \cdot \frac{r}{2} = -\frac{B^2 r^4}{16R} (\omega' - 2\omega)$$

となる. これは ω' について指数関数型の微分方程式となっており, $\omega' = 2\omega$ に収束することが確認できる.

^{*3} 回転の運動方程式 (高校範囲外): $I \frac{d\omega}{dt} = N$.

I は慣性モーメント (回転のしにくさ), $\frac{d\omega}{dt}$ は角加速度, N は力のモーメントである.

^{*4} 導体棒の慣性モーメント (m は導体棒の質量): $M = \int_0^r \frac{m}{r} x^2 dx = \frac{1}{3} mr^2$.

第3問（核反応，半減期）

【メモ】

・問2は複数物体系の力学と同様の手続きで立式すればよい．原子物理では，運動量の大きさ p を用いて運動エネルギーを $K = \frac{p^2}{2m}$ と表したり，逆に $p = \sqrt{2mK}$ と表すように誘導が付く場合もある．これらの表現を暗記する必要はないが，出くわした際に困惑しないようにしておく．

・ α 崩壊は原子核からヘリウム原子核が放出されることで，質量数が4，原子番号が2減少する． β 崩壊は原子核から速い電子（と反電子ニュートリノ）が放出される．このとき，1つの中性子が1つの陽子に変わり，原子番号が1増加する．

【解答】

問1 エネルギー保存則より*5，

$$M_0 c^2 = M_1 c^2 + m^2 + K_Y + K_\alpha, \quad \therefore K_Y + K_\alpha = \underbrace{(M_0 - M_1 - m)c^2}.$$

問2 エネルギー・運動量保存則より，

$$\begin{cases} \sqrt{2M_1 K_Y} + \sqrt{2m K_\alpha} = 0, \\ M_0 c^2 = M_1 c^2 + m^2 + K_Y + K_\alpha, \end{cases} \quad \therefore K_\alpha = \frac{M_1}{M_1 + m} \underbrace{(M_0 - M_1 - m)c^2}.$$

問3 力学的エネルギー保存則より，

$$k_0 \frac{79e \cdot 2e}{r} = K, \quad \therefore r = \underbrace{\frac{158k_0 e^2}{K}}.$$

問4 質量数，陽子数の変化に注目して，

$$\begin{cases} -4n = -12, \\ -2n + k = -4 \end{cases} \quad \therefore n = \underline{3}, \quad k = \underline{2}.$$

問5 4.5×10^9 年前のそれぞれの残存粒子数をそれぞれ $^{235}\text{U}(0)$ ， $^{238}\text{U}(0)$ とする．そこから t 年後の残存粒子数はそれぞれ，

$$\begin{cases} ^{235}\text{U}(t) = ^{235}\text{U}(0) \left(\frac{1}{2}\right)^{t/7.5 \times 10^8}, \\ ^{238}\text{U}(t) = ^{238}\text{U}(0) \left(\frac{1}{2}\right)^{t/4.5 \times 10^9}. \end{cases}$$

$t = 4.5 \times 10^9$ 年でその存在比が1:140を満たすので，

$$\frac{^{238}\text{U}(4.5 \times 10^9)}{^{235}\text{U}(4.5 \times 10^9)} = \frac{^{238}\text{U}(0) (1/2)^{4.5 \times 10^9 / 7.5 \times 10^8}}{^{235}\text{U}(0) (1/2)^{4.5 \times 10^9 / 4.5 \times 10^9}} = \frac{140}{1}, \quad \therefore \frac{^{238}\text{U}(0)}{^{235}\text{U}(0)} = \underline{\underline{\frac{35}{8}}}.$$

*5 これを反応熱と呼ぶ．

問6 与えられた数値より,

$$\begin{aligned} Q &= \frac{1.1 \times 10^{-7} \text{ kg}}{235^{-3} \text{ kg/mol}} \times 6.0 \times 10^{23} / \text{mol} \times 2.0 \times 10^8 \times 1.6 \times 10^{-19} \text{ J} \\ &= 8.98... \times 10^8 \text{ J} \\ &\simeq \underline{\underline{9.0 \times 10^8 \text{ J}}}. \end{aligned}$$